

私の郵趣道

大沼幸雄

退職後にどのように人生を有意義に過ごすかが悩ましいところ。パターン化すれば「趣味没頭型」「仕事継続型」「海外旅行型」「天下国家論型」「悠々自宅型」「濡れ落ち葉型」等々いろいろある。どれもが優劣をつけがたい。何しろ個人の価値観は多様なので、要は、「それが楽しい」のであれば何をしても良いと思う。

退職した2004年春、67才のとき急性肺炎を患って入院中のベッドで「来し方、行く末」をしみじみと考えてみた。それまでには俳句、書道、囲碁などいろいろ手がけたが、いずれもものにならない。そこで子供の頃に手掛け、多少心得のある音楽郵趣にしようと思い心に決めてベートーヴェンを選んだ。何故ベートーヴェンかというと、第一に、音楽家切手のうち種類の多さでは、ベートーヴェンとモーツァルトが双璧であること。第二に、では何故この二人の中でベートーヴェンかと言えば、ベートーヴェンの時代の方がフランス革命、ナポレオン戦争などはるかに起伏に富んでいること。わずかの年齢差で、芸術家の生き方も大きく変わらざるを得ない時代である。ベートーヴェンの時代の方が、はるかに変化に富み、題材豊富で面白い。

退院後、このテーマで作品を作ろうと



約5フレーム相当を作り、7月に審査員内藤陽介さんによるコンサルと受けた。結論から言うと「5フレームを3フレームに集約せよ」と言われショックを受けた。徹底的に直そうと大小合わせて69点の指摘を細大漏らさずメモした。次月に3フレームで、再度、コンサルを受けた。今、2回のメモを読み返すと、いかに一点一点が、価値あるアドバイスであったかが良くわかる。

その年の11月に、ジャペックス'04へ応募したところ、いきなり「金賞」と「小倉謙賞」をいただいた。こう言うとあたかも、突如すごい賞をもらったような印象を持つかもしれない。しかし、それまでにある程度蓄積したものが、これを機会に芽を吹いたというのが本音である。中学生時代

から音楽切手を集め始めている。サラリーマンになってからも、熱の入る時期と入らない時期はあったが、音楽切手を片端から収集して来た。だが、なんといってもロンドン、ニューヨーク駐在時代に、各地の音楽切手グループに所属して、受けた刺激が大いに役立った。月一

回、仲間と一緒に食事をしたり、コンサートへ行ったり、コレクションを見せてもらったり、勉強会もしたので、自然とテーマティクとは何か身についていたような気がする。

この2004年のジャペックスでの「金賞」が契機となり、それ以来、海外での他流試合に邁進した。2005年のルクセンブルクを



革切りに、ミルウォーキー、ザルツブルク、ゲント、バンコック、テルアビブ、洛陽、ソウル、ヴォルムス（ドイツ）、デンバー、リッチモンド、リスボンと毎年2回程度は、海外に出かけ、その都度、欠かさず展示物を自分で持参し、講評をこと細かくメモする習慣をつけた。こうした旅行を、私は勝手に「フィラホリデー」と名付け、つねに家内と二人で出かけ、観光も兼ねることにしている。浮き沈みは何回かあったが、めげずに続けて5年後の2009年に、ソウルのFIAP国際展で初めて「金賞」、2011年横浜でFIP世界展でも初めて「金賞」を頂くことができた。

また趣味からの派生ではあるが、彩流社から3冊の本を出版することもできた。そのうち一冊は、ベートーヴェン・ハウスのウェブ上の展覧会を日本語に翻訳して出版したものである。それが縁となって昨年春には、ドイツのボンにあるベートーヴェン・ハウス（生家で、現在は記念館）で3ヶ月間にわたり「ベートーヴェン-その生涯と遺産」と題する特別展示会を開催することができた。これはわが郵趣人生の一つのモニュメントとも言える。

一方、2008年には、有志とともに「テーマティック出品者の会」（代表：内藤陽介氏）を立ち上げた。テーマティックの楽しさをできる限り広く伝えたいと思ったからである。毎年、スタンプ・ショー、全日展、ジャペックスでは合評会を開いたり、適宜、セミナーなどを開いたりして会員同士が相互に刺激を受けるように図っている。2012年、貴部会の山田精一さんが「バラの来た道—その生い立ちと人々とのかかわり」で金銀賞・小倉謙賞に輝いたが、彼はテーマティ

ック出品者の会のメンバーである。また貴部会員で2011年「園芸の歴史」で同じく金銀賞・小倉謙賞に輝いた嘉ノ海暁子さんにも、ご入会をいただいている。テーマティックにご関心をお持ちの方は、ぜひともご入会をお奨めしたい。

振り返ると、2004年の趣味の選択が誤りではなく、それどころか大いに豊かな人生を送ることができたと実感している。

第一に、テーマティックは「画像と文字」「絵画と表現力」との融合であり、調査力、ストーリー構築力、論理性、簡潔性、美的レイアウトなどが凝縮されているアートである。私は、これを「フィラテリック・アート」と呼んでいるが、実に奥が深く面白。

第二に、いろいろな人々と出会える場もできた。

第三に、どのような趣味も同じだが、一つのことを深く追及すると、新しい地平線が見えてくる。出版、特別展示会などと、つぎつぎと新しいことが連鎖的に起きてくる。

日本人は、「道」という言葉が好きである。柔道、剣道、茶道、書道、華道、棋道など枚挙にいとまがない。最近では、装道などという言葉もある。要は徹底して深く追求することが好きな国民性らしい。しからば「郵趣道」という言葉もあってよい。スティーブ・ジョブズの「Stay Hungry, Stay Foolish」（求めよ、そして愚直に追及せよ）は、けだし名言。私もこの姿勢で、まだ「郵趣道」を追及し続けたいと願っている。

以上